

## (1) 京都市におけるコクサッキーAウイルスの分離状況について

微生物部門  
杉江 真理子

## ア 発表先

平成23年度地方衛生研究所全国協議会近畿支部ウイルス部会研究会（平成23年9月30日 奈良市）

## イ 抄録

## (7) 目的

手足口病の原因とされるウイルスは主にCA16型とEV71型であるが、2011年はCA6型が流行した。本研究ではCA6型を中心に2011年のコクサッキーAウイルスの分離状況についてまとめた。

## (8) 方法

病原体定点病院より受け付けた検体について、RD-18S細胞及び0日齢ddY系は乳マウスに接種し、ウイルス分離を行った。分離されたウイルスについては中和反応、補体結合反応及びRT-PCRとダイレクトシークエンス等により血清型別を決定した。

## (9) 結果・考察

CA6型については、過去16年でもっとも多く分離した。特に、手足口病の患者あたりの分離率はCA6型のみで約60%と、高率で分離した。しかし、RD-18S細胞によるCA6型の分離率は過去16年と比較して低下した。

## (2) 小児外来における急性呼吸器感染症からのヒトメタニューモウイルス(HMPV)の分離・検出と臨床的及び疫学的検討に関する研究

微生物部門  
吉岡政純, 近野真由美, 杉江真理子, 中村剛, 馬口敏和, 木澤正人,  
梅垣康弘, 池田雄史, 伊藤正寛, 石橋修, 石川和弘

## ア 発表先

厚生労働科学研究費補助金「重症呼吸器ウイルス感染症のサーベイランス・病態解明及び制御に関する研究」  
平成23年度第1回及び第2回研究班会議（東京都）

## イ 抄録

## (7) 目的

呼吸器ウイルスは肺炎などの重症呼吸器感染症を引き起こす。わが国では重症呼吸器感染症が原因で年間約10万人が亡くなっているが、病原ウイルスに関して未だ解明されていないことは多い。重症呼吸器ウイルス感染症対策の一助として、国立感染症研究所と共同でヒトメタニューモウイルス(HMPV)のサーベイランスの強化に取り組むことを目的とした。

## (8) 方法

京都市のサーベイランス事業において、市内3ヶ所の定点病院で2011年1月～12月に採取された咽頭ぬぐい液502検体について解析を行った。病原体検出マニュアルに従い、HMPVの検出にはRT-PCRを、ウイルス分離にはVeroE6細胞を用いた。

## (9) 結果

502検体のうち、43検体からHMPVが検出され、6株が分離された。系統樹解析の結果、サブグループはA2型が最も多かった。年齢別では0～2歳児の患者から検出される割合が高く、季節別では3月をピークとして春に流行がみられた。

## (10) 考察

以上の結果より、HMPVは京都市においても流行がみられることが判明し、特に小児の呼吸器感染症を考えるうえで重要なウイルスであることが分かった。

## (3) 豚丹毒菌の培養方法に関する検討

食肉検査部門

村北佳史, 田村和義, 伊東大輔, 川崎成人, 中川善宏

## ア 発表先

平成23年度全国食肉衛生検査所協議会近畿ブロック会議 技術研修会 (平成23年11月4日 奈良県)

平成23年度全国食肉衛生及び食鳥肉衛生技術研修会並びに衛生発表会 (平成24年2月14日 東京都)

## イ 抄録

豚丹毒は、豚丹毒菌 (*Erysipelothrix rhusiopathiae*) の感染によって起こる豚の疾病であり、と畜場法に基づくと殺及び解体禁止、全部廃棄対象疾病に指定されている。病変部から、菌が分離されるかどうかで合否判定を行っているが、今回、豚丹毒菌の培養方法について検討した。

関節炎型豚丹毒を疑い保留した41例のうち、32例で豚丹毒菌を検出し全部廃棄した。実際の細菌検査では、他の菌のコンタミネーションを防ぐ目的で、抗生物質を培地に加えている。しかし、今回の調査では、全部廃棄した32例のうち、抗生物質を加えない培地のみで豚丹毒菌を検出した事例が7例あり、抗生物質が豚丹毒菌の発育を阻害していることが示唆された。分離された豚丹毒菌を用い、薬剤感受性試験を行ったところ、使用した抗生物質6種いずれも薬剤耐性が認められたが、生菌数を測定すると、濃度依存的に豚丹毒菌の増殖は抑制された。このことから、抗生物質を加えた培地だけでなく、抗生物質を加えない培地も検査に用いるべきであると考えられる。

## (4) 牛胆汁中のカンピロバクターの低温管理における菌消長について

食肉検査部門

川崎 成人, 村北 佳史, 田村 和義, 中川 善宏

## ア 発表先

## (7) 掲載誌名

獣医公衆衛生研究 2011. 9 VOL. 14-1 (平成23年度調査研究発表会 特集号)

## (i) 発表先

平成23年度近畿公衆衛生関係獣医師協議会総会 (誌面のみ) (平成23年7月8日 神戸市)

平成23年度全国公衆衛生獣医師協議会 全国会議「研修及び調査発表会」(平成23年9月2日 東京都)

## イ 抄録

近年減少しつつある他の食中毒起因菌とは異なり、カンピロバクターによる食中毒の発生は増加しており、低温管理による菌の増殖抑制が小さいと言われている。そこで、京都市中央卸売市場第二市場に搬入された牛の肝臓及び胆汁を低温保存し、経時的に保菌状況を調査した。平成21年10月から平成22年2月の間に胆汁40検体、肝臓実質13検体を調べたところ、胆汁16検体及び肝臓実質2検体から *C. jejuni* が分離された。さらに検体を4℃で低温保存し、経時的に保菌状況を調べた結果、14日後の胆汁6検体、肝臓実質1検体からも *C. jejuni* が分離された。この結果から、カンピロバクターについては、単に低温管理のみでは発症リスクを抑制することが困難であり、生食の危険性を改めて周知していかなければならないと示唆された。

## (5) 牛の第四胃の腫瘍

食肉検査部門

中川 力

## ア 発表先

平成23年度全国食肉衛生検査所協議会病理部会第63回病理研修会 (第62回再検討課題)

(平成23年11月10日, 11日 神奈川県)

## イ 抄録

動物名: 牛 品種: 黒毛和種 性別: 牝 月齢: 28カ月齢

病歴: 不明

生体所見：一般と畜として搬入。著変認めず。

内臓所見：第四胃粘膜がカリフラワー状または乳頭状に増殖しており、それらが癒合して白色～淡赤色，小児頭大の柔軟な腫瘤を形成していた。断面は水腫様，脆弱であり，濾胞を含む部位を認めた。断面の色調は中央部が乳白色，表面付近は赤みを帯びていた。また，腫瘤の中心付近には結合組織様の白色部を認めた。

漿膜面及び他臓器には著変を認めなかった。

組織所見：腫瘤内の胃粘膜上皮は不規則に増殖しており，重層化した部位も認められた。腺管の一部は嚢胞状に拡張しており，上皮細胞の扁平化がみられた。粘膜固有層には炎症細胞の浸潤と血管増生及び浮腫が認められた。

また，腫瘤中心部では粘膜筋板の挙上が見られ，粘膜下組織には膠原線維が増生していた。

組織診断名：過形成性ポリープ

疾病診断名：過形成性ポリープ

## (6) 京都市における酸性雨陸水調査について—近年の「沢の池」の水質と降水の比較—

環境部門

梶由佳，齊藤奈穂，出口夫美子，大竹秀平，勝見潤子，若林佳弘

### ア 発表先

第26回全国環境研協議会東海・近畿・北陸支部研究会

### イ 抄録

#### (7) 目的

酸性雨に感受性が高いことが明らかになっている市内の沢の池について，継続して水質調査を行い，沢の池の最新の動向を探る。

#### (8) 方法

沢の池水質を市内降水調査結果他と比較する。

#### (9) 結果

池水 pH 推移は，既報のとおり降水量・水位の変動と類似の挙動を示した。また降水 pH 推移とも類似した。降水量・水位の増減と池水 pH・降水 pH の上下の変動パターンも類似していた。池水 pH は近年やや高め値で推移し，イオン類では Ca<sup>2+</sup>濃度のみを上昇傾向が見られた。溶存 Al 濃度は，環境省陸水調査の対象湖沼の中で最も高い値で推移していた。対して市内降水は，pH，イオン類はほぼ一定の水準で推移し，特に傾向はなかった。

#### (10) 考察

沢の池は，降水 pH 推移がほぼ正確に反映される希少な池であることが裏付けられた。池水 pH が上昇傾向にあるか否かは，現段階では判断し難い。また，池水の Ca<sup>2+</sup>濃度上昇についても，現段階では原因不明であるが，酸性雨影響の指標の1つである溶存 Al 濃度が高い値で推移していることもあり，今後もこれらの推移を見ていきたい。

